

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

道

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: ja 出版者: 神戸市外国語大学研究会 公開日: 2023-12-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 難波江仁美 メールアドレス: 所属: 神戸市外国語大学 |
| URL | https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2000009 |

道

難波江 仁美

31年間勤めた神戸市外国語大学をこの春退職いたしました。わたしにとって外大は自由に仕事を続けることのできる場でした。その後ろ盾があったからこそ、授業や学務、そして学会活動をとおして様々な出会いや経験を得ることができたと思います。途中で挫折しそうになったこともありますが、なんとか無事に外大での勤めを全うすることができたことに感謝しています。

1992年3月、初めて外大を訪れたとき、当時の教務委員の先生に学内を案内していただきました。ゆったりとした物腰のその先生が「授業は好きなようにしたらいいですから」とおっしゃってくださりとても安心しました。とはいえ、歓迎会の席で急に喧嘩が始まってびっくりもしたのですが、それでもどこかのんびりとした空気が漂っていました。わたしといえば独りよがりや協調性もなく、「好きなように」振る舞っていて今思うと恥ずかしいのですが、先輩の先生方は寛容にそれも見守ってくださっていたように思います。

忘れられない大きな事件といえば、1995年1月17日月曜日早朝に神戸を襲った阪神・淡路大震災です。尼崎に住んでいましたので幸い住居の倒壊といった事態は免れたものの、気がつくとも電話がつながらず、緑色の公衆電話を探して大学へ電話をしました。近くに公衆電話があったことも今となっては懐かしい風景です。東西の公共交通機関は分断され、六甲山の北側を迂回して電車を乗り継がなければ大学には辿り着くことができず、またその年は入試委員と教務委員を兼務していて、研究室に寝泊まりすることもありました。学園都市周辺は水道・ガス・電気のライフラインが健在で、ご家族で避難されていた先生もあり、また構内には神戸市の仮設住宅も並びました。神戸と大阪との2箇所一般入試を行ったのも後にも先にもこの年だけで、わたしたち入試委員はバスで外大と大阪の試験場を往復しました。それでも春になるとキャンパスには桜が咲き、新入生を迎えることができたのです。教職員の方々とは共に奮闘したという不思議な連帯感がこのとき生まれていたように思います。

就任したころ、若手は二部英米学科の専任に振り当てられていましたので、

夜の授業を昼よりも多く担当していました。自分よりも経験のある社会人学生を含む二部の授業は緊張の連続でしたが、学生はみな熱心で授業にも活気がありました。専攻英語の講読では小説が読めるのがうれしかった。自分が読みたい、あるいはまだ読んでいない作品を敢えて選んで課題にしました。それで毎週 10～20 頁の宿題を出したところ、学生に「これは外大の授業ではない」と指摘されました。一文一文丁寧に日本語に訳す精読の授業に慣れていたのです。また社会人学生には、300 頁を超える小説を仕事鞆に入れて持ち歩くのは不便、配慮が足りないとも言われました。そうした学生たちの声に応えようと工夫を重ねましたが、小説を一冊授業で読み切りたいという思いは変わりませんでした。そして今でも、それが語学を学ぶ上で持久力や達成感につながると信じています。

最後の年に思い立って、最初に教えた作品をもう一度授業で読むことにしました。ジェイムズ・ボールドウィンの『ジョヴァンニの部屋』(1956)です。すでに出ていた翻訳書に「同性愛者の世界」「この異常な生活」などという文言が使われていたからだと思いますが、学生から「こんなものを教えていいのですか?」と詰め寄られました。ですが 30 年後、そうした戸惑いの声は全く聞こえてきませんでした。ジェンダーや LGBTQ+ についての情報は浸透し、学生の関心も高まってきたからでしょう。この小説が問題にするアイデンティティやコミュニケーションギャップといった心の葛藤に学生たちは敏感に反応しました。最後の課題は、小説の一部をもとにドラマのシナリオを英語で創作して演じてもらうというグループワーク。すばらしかったです。ライブ上演あり、アニメ作品あり、動画作品ありとアナログとデジタル双方のツールを使いこなした秀作揃いでした。21 世紀を担う学生たちの能力とその可能性を強く感じました。一つの小説を読み切り、それぞれの違った解釈について意見を交わすという授業は意外と新鮮だったようです。そして物語に想像力を働かせる「遊び」という要素が加わることで、彼らの思考回路も活性化されたのでしょうか。この 3 年間、コロナ禍で文字通りリモート生活を強いられましたが、つながろう、伝えようとする強い思いが彼らにはありました。同時に、ボールドウィンの小説の、見える表層の世界から見えない内面の世界へと沈み込んでいくような、そして生きることがこれほど哀しいと感じさせるような、そんな物語の力が身体感覚として彼らに伝わったのだ、と密かに思っています。

コロナ禍でキャンパスライフが消えた 2020 年春、学生たちに何か発信したいという思いから、わたしは魅力発信事業「神戸発!」を企画しました。対面授業が復活するまで結局魅力のシリーズは 3 年間続き、合計 18 回の講演会を配信しました。その動画はすべて外大 YouTube で公開されています。その中の一つのタイトルに「いざとなつての大切なこと」がありました。それはコロナ禍のわたし

たちがまさに必要とした知見でした。その講演者の方は「ネットの情報は腐ったりりんごと同じですよ」ときっぱり。思いもしないような事態に直面したとき、どのようにそれに対処するのか、情報や知識をどのように活かすのか。できることは、状況にあわせて「わたし」が想像力を働かせて考え、軌道修正しながら答えを導き出すことしかありません。魅力発信の講演はそうした「いざ」というときに向き合った体験談の宝庫となりました。外大での最後の3年間、学生とも教職員の方々とも対面で話し合う機会はほとんどありませんでしたが、オンラインを介して言葉の力、そして連帯と個人のありようについて考えるきっかけを提供できたのであればうれしい限りです。

どちらかといえば消極的だったわたしに魅力発信のような大学の事業を運営できたのは、素晴らしい講師の方々との出会いと大学関係部署の職員の方々の見事な連携があったからでした。そしてまたわたし自身の研究においても、国内国外の学会活動に関わることができたのは、やはりかけがえのない出会いがあったからで、最初に先輩教員や研究者からのお声かけがなければおそらく何も知らないままに終わっていたでしょう。事務的な仕事は時間を取られる作業ではありましたが、最終的には海外の研究者との交流、いえそれ以上に友情を深めるといった得難い経験につながりました。

大学での仕事には終止符を打ちますが、まだ道半ばという思いです。道の先に何が見えているのか、また何を見ようとしているのか、わかりません。すこし腰を据えて本を読みながら、そして新しい出会いに期待しながら、好奇心を灯火にしてこの瞬間を楽しみ、少しずつ歩んでいきたいと思います。